

ここでは、令和7年度の中学校数学科授業力向上プロジェクトの実践で、大切にしてきた授業改善の様々な視点の中から「指導と評価の一体化」について情報発信するとともに、研究員の実践事例についても紹介します。

1 「指導と評価の一体化」に向けて

教科の指導を行う際には、単元の目標とそれに応じた評価規準を設定し、1時間1時間の授業をどのように行い、どのような資質・能力を育成するのかを意識して単元を構想します。そして、授業ごとの目標（ねらい）に対する子どもの学びの状況を振り返り、授業者の指導改善や子どもの学習改善につなげていきます。そのためには、授業ごとの目標（ねらい）に応じた評価の視点が必要となります。ここでは、第3学年「2次方程式」の単元において、ある1時間の授業（記録に残す評価を実施する授業）を例にして、大切にしたいポイントをまとめています。

○ 本時の授業

「因数分解」、「平方根の考え」、「解の公式」それぞれを使って2次方程式を解く学習をした後の「知識・技能」の定着を図る時間

○ 本時の目標（ねらい）

既習事項を振り返り、2次方程式を解く際の注意点を整理することにより、いろいろな方法で2次方程式を解くことができる。【知識・技能】 <ワークシートの記述を評価>

評価	評価の視点
「おおむね満足できる」状況 (B)	気を付ける視点が書かれており、2次方程式を解くことができているかどうかを見取る。
「十分満足できる」状況 (A)	気を付ける視点とその視点を選んだ理由が書かれており、その視点を意識しながら2次方程式を解くことができているかどうかを見取る。
努力を要する状況への手立て	「因数分解」、「平方根の考え」、「解の公式」のどの考えを使った解法が苦手なのかを確認し、全体で共有した注意点を参考にさせることで、自分が気を付ける視点が何なのか、見通しを持たせる。



授業者が果たす役割

- 単元や授業の目標（ねらい）と評価規準（評価の視点）を子どもと共有する。
- ルーブリックや振り返りシート等を用いて、子どもが自分の学びを振り返る仕組みをつくる。
- 評価の視点をもとに、どこがよいか、どこを改善すべきかを具体的に子どもに伝える。



期待する子どもの姿

- 単元や本時の授業で「何ができるようになるか」を把握し、学習の見通しを持つ。
- 協働的な活動を通して、多様な考えを認め合い、学びを深める。
- ルーブリックや評価の視点を理解した上で、改善点を見つける。

授業ごとの評価をその後の指導改善や学習改善に生かす

- 評価で得られた情報から、次の授業の構成や支援方法を見直す。
- 子どもの実態に合わせて、単元構想を柔軟に再設計する。
- 授業展開と評価を往還させながら、学習指導の質を高める。

- 問題解決の過程を振り返り、次時以降の学習において、新たな発想を生み出す。
- 自分の課題や伸ばしたい力を踏まえて、学習方法を再考する。
- 授業者からのフィードバックを活用し、学習の質を高める。



評価の視点を明確にすることで、本時の授業で、どのような学習活動が必要か、どのポイントを押さえる必要があるか、ワークシートの内容をどのように工夫すればよいか、さらに十分に満足できる状況に到達させるためには何が必要かなど、授業デザインがイメージしやすくなりました。

2 「きらりと光る」研究員の実践紹介

学習形態を選択

※「個別」・「ペア」・「グループ」・「授業者と」



授業者が目的・意図を持って、子どもに学習形態を指示することに加えて、子ども自身が自分の状況を踏まえて学習形態を選択する機会を設けています。そのことで、学習意欲の向上や自己管理能力の高まりが期待できます。

このような場合においても、授業者は様々な学習形態で学ぶ子どもの状況を適切に見取ることが必要です。授業の最後にもう一度、個人で適用題に取り組みさせる機会を設けたり、振り返り活動を工夫したりすることで一人一人の学びの状況を適切に見取るようにしましょう。

ICTの効果的な活用

※ 授業者それぞれの実践をデータで蓄積することで、学校（市）全体の知的財産になり得る



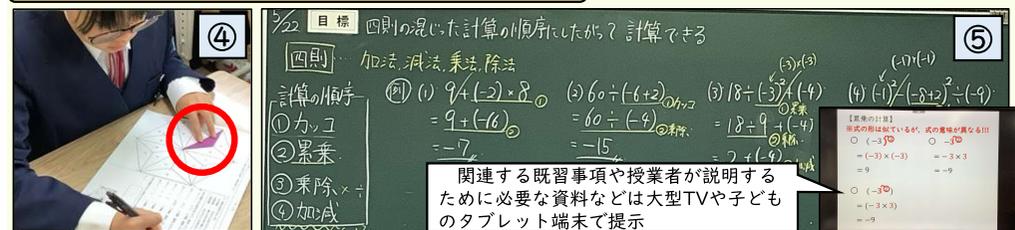
①は、辺上を動く点のイメージを持たせるために、教科書のQRコンテンツにはないものを授業者が作成したアニメーションです。動点の動きを視覚的に確認することで、問題の理解や見通しを持つことにつながります。

②は、クラウド上にある各学力層に応じた問題であり、授業者の指示や子ども自らが問題を選択して取り組みます。授業内外に限らず、子どもの好きな時間に取り組めることも強みです。

③は、授業者が「ヒントカード」を作成し、特定の子どもにタブレット端末を用いて送信したり、子ども自らがヒントカードが必要かどうかを判断して活用したりします。見通しを持たせたり、大切な視点を与えたりすることは、個に応じた効果的な支援につながります。

以前から大切にしてきたアナログ*のよさ

「アナログ*」…紙、実物、実体験等と定義する

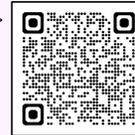


④は、図形の移動（平行・回転・対称）を学習する際に、具体物を実際に操作しながら、ワークシートに取り組んでいる場面です。具体的な体験を伴う学習を通して、数量や図形について実感を伴った理解につながっています。

⑤のように、デジタル機器での提示と板書を目的に応じて使い分けることも重要です。板書では、問題解決に必要なポイントを整理したり、授業の流れが一目で分かるようにしたりしましょう。

学びの軌跡を可視化

※ 事例はこちら



授業ごとの振り返りをデータとして蓄積することにより、子どもにとって、授業ごとの関連性や理解度が捉えやすく、単元や学習のまとまりを把握しやすくなります。



「子ども一人一人の学習の成立を促すための評価」という視点を一層重視することや、授業者の意図を明確にした授業づくりを大切に、授業改善に取り組んでいきましょう。